## 雷車

(48) ォト劇場

## ものがたり

電の屋根に灰はふりつむ 「じゃっど」「ないごて」鹿児島弁の充ち満てる市ができまべん

奥

浩昭

弁独特のことばや語尾、 点谷山駅まで片道四十分の車内には、鹿児島 に乗った。始発の鹿児島駅から職場のある終 ていた。夏の鹿児島市は降灰を多く見た。 鹿児島市に住んだ二十代半ばの二年間、 音の抑揚が飛び交っ 市電

「まあガザの子ね」

目瞑れば都電は遥か宙の駅「あ、

奥呂美生

カンパネルラ」

銀河を旅して行くのでしょう。どうぞ安らか 立って宙の駅で待っていた子どもたちを乗せ でも続く線路のこの都電。悲惨な今の世を旅 な旅でありますようにと祈るばかりです。 線路はどこまでも続くと歌い覚えた。どこま



写真·木畑紀子

## 細長き電停の上立つ人の横に立ちたり仲間となり

栗山貴臣

7

で、待っている人同士に不思議な連帯感をもす。大通りの流れに取り残された砂州のよう「電停」と呼ばれた乗り場を懐かしく思い出高校への通学時には路面電車を使っていた。

の子ども 栗山由利縄一本あれば電車に早がはり車掌はわたし 昭和

たらしてくれた。

でっこ。路面電車などない田舎町だった。 大勢で缶蹴り、縄があれば輪っかにして電車 た勢で缶蹴り、縄があれば輪っかにして電車 の子どもはたくましかった。地面に案山子のの子どもはたくましかった。地面に案山子の